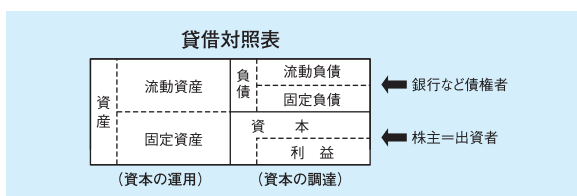


取引先のここをチェック② 取引先企業の「支払能力」を見る



立命館大学 教授 松村 勝弘

■ 借入金など有利子負債依存



企業の成長のためにはさまざまな資金を活用する。貸借対照表は左側(借方という)に資産の諸項目が表示されており、これは資本が何に使われているか(運用形態)を表しており、右側(貸方)には負債や資本の諸項目が表示され、これは資本がどこから調達されたか、つまり銀行からの借入によって賄われているのか、株主からの出資によって賄われているのか、あるいは、企業の儲けの蓄積で賄われているのか、を表している。高度成長期の日本企業では、つくれば売れるという時代であったので、どこからでも資本を調達して設備投資を行い、製品を作れば売れたわけである。いわゆる借金経営である。今でも急成長企業のなかには借入金を利用するものもあるが、不況の昨今、企業はできるだけ借金を返済しようとしている。銀行借入だけでなく、証券市場で社債を発行して調達する場合も、これらはいずれ返済を要する資金源であり、かつ金利を支払う必要があるため、借入金と社債を合わせて有利子負債という。要するに返済を要する資本で企業活動を行おうというわけである。有利子負債に依存して経営を行っている企業については、元利返済能力に注意する必要がある。

■ 業種別・規模別有利子負債依存度

資産合計に占める有利子負債の額を「有利子負債依存度」という。これは業種によって異なる。安定的に収益

を稼働できる業態であれば有利子負債に頼っても、元利返済は容易であるかもしれないが、ベンチャー企業など将来性が不安定な企業はこれに依存することはリスクである。融資する側も慎重にならざるを得ない。あるいは高収益力を背景に有利子負債に依存する必要もない企業もある。業種的に電力・ガス業のそれは45.7%となっているが、これは公益企業で収益が安定しているかつ設備投資に巨額の資本を要するので有利子負債依存度が高く、医薬品産業では9.25%となっているが、これは高収益のため有利子負債をあまり必要としないからである。

2004年度法人企業有利子負債依存度と当座比率

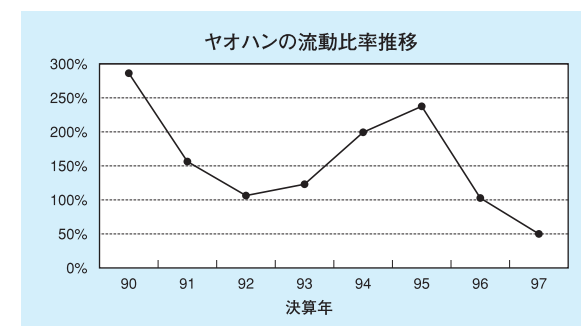
| 企業区分 | 資本金階級 | 有利子負債依存度 | 当座比率 |
|---------|-------------|----------|-------|
| 零細企業 | 1千万円未満 | 62.2% | 68.7% |
| 小企業 | 1千万円以上1億円未満 | 46.7% | 85.8% |
| 中企業 | 1億円以上10億円未満 | 35.8% | 70.6% |
| 大企業 | 10億円以上 | 29.8% | 65.6% |
| 全法人企業平均 | | 38.2% | 72.6% |

2004年度「法人企業統計」によれば大企業は有利子負債依存度が低い、中小企業はそれが高い。収益力の低さや証券市場へのアクセスの困難さから銀行借入に依存せざるを得ないことを表している。この間、大企業は有利子負債依存度を低くしてきているが、中小企業はそうはいかなかったことを表している。中小企業は資金繰りの苦勞が絶えないはずである。

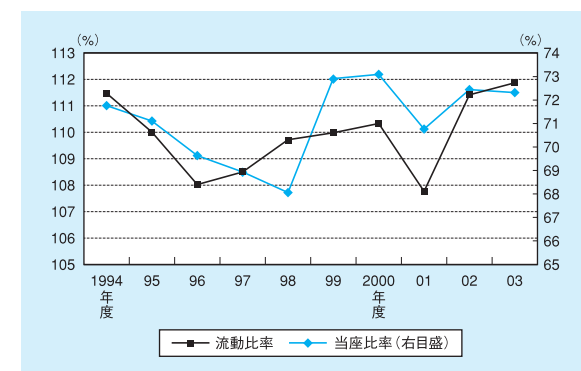
■ 資金繰りが苦しいかどうか

当面の資金繰りが苦しいかどうかを見るために「流動比率」(＝流動資産÷流動負債)というのがある。業種によって異なるが、200%以上が望ましいとされている。しかし実際には100%をかなり超えているレベルでよい。これが100%以下なら資金繰りが火の車である可能性があ

る。1997年に倒産したヤオハンの倒産前の「流動比率」を表した下図はよくその傾向を表している。ヤオハンの流動比率が倒産前に急落していることがわかる。「流動比率」が急激に悪化していないかどうか注目すべき点である。



より直截的な支払能力を表す指標に「当座比率」がある。これは現金・預金、売上債権、有価証券などの「当座資産」を分子にとり、「流動負債」を分母にして計算したものであり、「当座資産」はすぐに現金化できる資産であり、負債返済能力を「流動比率」よりももっと直截的に表している。これは100%以上あるのが望ましいとされているが、全体に、日本企業ではこれより少し低い。これら比率の1994年度から2003年度までの推移を表にしたものが下図であるが、ここから、銀行の貸し渋りなどで日本企



業の資金繰りが苦しかったのは、1996年度から1998年度にかけてと、2001年度の2回であることがわかる。

また、先の2番目の表から、2004年度「法人企業統計」により企業規模別に当座比率を見てみると、資本金1千万円未満の零細企業の当座比率が低く、これらが資金繰りに苦勞していることがわかる。

「流動比率」にせよ「当座比率」にせよ、日本企業が低いのは、低くても、必要なときに銀行からの融資を仰ぎやすかったということが、その背景にある。銀行が融資姿勢を厳しくすると中小企業でたどころに資金繰りが苦しくなるのはそのためである。

■ インタレスト・カバレッジ・レシオ (利払能力)

有利子負債は決済しなければならないので支払能力が重要であることは間違いないが、もう一つ金利支払能力も重要である。金利は収益の如何にかかわらず支払う必要のあるものである。金利支払能力のあるなしを判別する指標としてインタレスト・カバレッジ・レシオがある。これは「(営業利益+受取利息+配当金)÷支払利息・割引料」で計算できる。つまり金利の何倍の利益があるかを表しており、利払い能力を表している。これは高いほどよい。もし仮にこれが1であるとしたら、金利支払で利益がすべて吹っ飛んで、経常利益ゼロとなる。だからこれが1をはるかに超えて、ゆとりを持っていることが望ましい。そうすれば多少の減益でも金利支払いで赤字になるということがない。通常中小企業は借入金依存度が高いので、利払い能力は低い。